

シンポジウムで行ったアンケートのまとめ

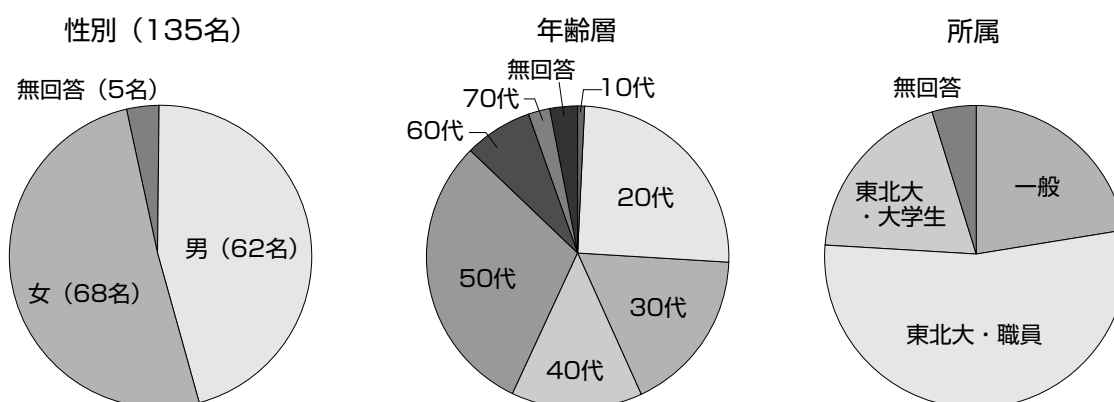
シンポジウムへの参加者にアンケートをお願いし、約30%の方々より回答をいただいた。その結果の概要をここにとりまとめる。なお、頂戴した意見・提言は当委員会のホームページ等に掲載する予定である。

Q1 あなたの性別と年齢をお教え下さい。

Q2 職業と、もしよろしければ、会社名、職名等もお教え下さい。

東北大学教職員の方は、所属部局・職名（常勤／非常勤）をお書き下さい。

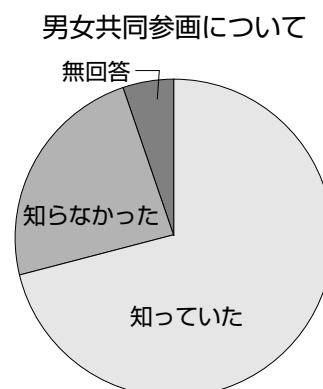
東北大学学生・研究生の方は、所属学部・研究科・学年をお書き下さい。



回答者の性別は男女ほぼ半々であった。年齢層は10代から70代まで各層にわたっているが、特に50代の参加者（回答者）が多かった。職業・所属は一般の方25%、東北大職員50%、学生・院生25%であった。なお、一般の方には福島大学、茨城大学、名古屋大学、秋田県からの参加者も含まれる。

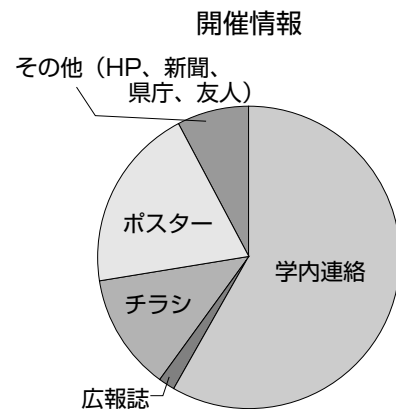
Q3 これまでに男女共同参画について何かご存知でしたか？

「男女共同参画」については、回答者の75%近くの方が知っていた。



Q4 このシンポジウムのことをどこでお知りになりましたか？

シンポジウムの開催に関する情報源としては、学内連絡（広報、パンフレット、掲示、事務連絡等）によるものが60%を占めた。ホームページ、新聞、県庁等で知ったという回答も散見された。



Q5 このシンポジウムに参加された動機は何ですか？

シンポジウムへの参加の動機については以下のように、いくつかのグループに分類できる。

1. 同僚、友人、事務、教授からの勧誘によって、
2. ポスター、広報、ホームページ等により興味を抱いて、
3. 男女共同参画についての興味から、および勉強の機会として、
4. 男女共同参画に関する特定の目的・興味対象に関する情報・知識を得るために（例えば、男女平等に関する意識改革の進展状況、学術分野での共同参画の現状、女性研究者問題、宮城県の高校の男女共学・別学問題、教育者として、女性教育者を増やすための制度改革、人権教育、職場・病院での意識改革、男女学生間のアルバイト情報に関する格差の是正に向けて、過度のジェンダー論に対する危惧から、等）、
5. 東北大学がこの男女共同参画推進に、なぜ、どのように取り組もうとしているかについての興味から（女子学生が初めて入学させた大学として、国立大学・旧帝大として）、
6. 職務上の必要性から（研究対象、研究テーマ、フェミニズム研究）、
7. 男女共同参画ワーキンググループメンバーとして、学内関連委員会委員として、
8. 男女共同参画に関する行政・実務を担当中で、共同参画推進に関する参考のため（大学、自治体、企業、等）、
9. これまでの男女の不平等についての経験から（実際に不平等の被害を受けたなど）、
10. 自身の将来計画への不安から（就職、結婚、家族、仕事、等）

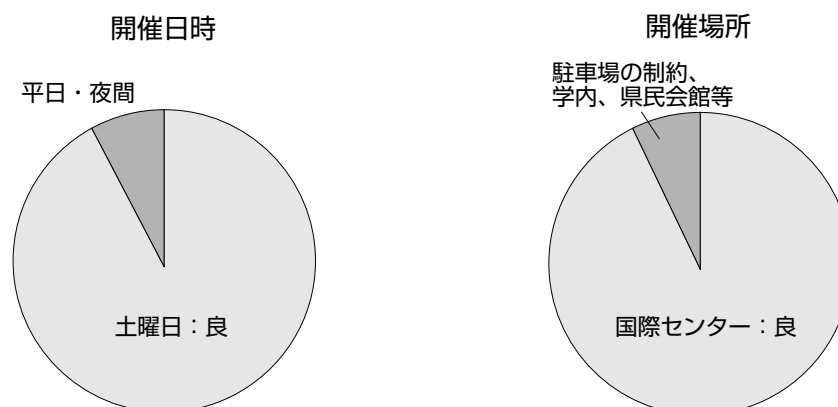
Q6 日時について：（a. 良かった、b. 悪かった）

bとお答えの方にお聞きします。どのような日時が良いでしょうか。

Q7 場所について：（a. 良かった、b. 悪かった）

bとお答えの方にお聞きします。どのような場所が良いでしょうか。

開催日時については平日ないし夜間を希望する意見もあったが、今回の土曜日を良とするものが90%近く、比較的多くの参加が得やすいものと思われる。開催場所は、東北大学内の施設、または市内中心部の施設を使ってはとの意見もあったが、国際センターを良とするものがやはり90%であった。



Q8 内容について：

- | | |
|----------------|------------------------------|
| 1) 活動報告 | a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない |
| 2) 基調講演 | a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない |
| 3) パネルディスカッション | a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない |
| 4) 東北大学宣言 | a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない |
| 5) 全体として | a. 良かった、b. 悪かった、c. どちらとも言えない |

シンポジウムの内容に関しては、すべてにわたり、良とするものが70-80%であった。

Q9 内容について、ご感想をお聞かせください。

基調講演については、「男女共同参画の学術における現状」、「男女のため」、「work&home」、「laissez-faireよりpositive action の必要性」などが分かりやすく話されたので好評であった。しかし、「全体の時間配分からはお一人でもよかったのではないか」との指摘や、「次回には、基調講演者を学内、あるいは男性からも選んでは」という意見も寄せられた。

パネルディスカッションについては、限られた時間の中で、整理された報告や議論が手際よくなされたこと、また、国際的な視点での意見も述べられたことなどから好評であった。しかしながら、配分された時間の短さのために、事項報告や問題の羅列にとどまり、相互に掘り下げた議論が十分にできなかったこと、反対意見グループとの討論、フロアと

の質疑応答ができなかったことなどへの不満も聞かれた。今後には、若手の教官職員、大学構成員の一翼である学生、さらに外部からのパネラーを含めたディスカッションが期待されていた。

これらを含め、シンポジウム全体としては、「気軽に参加できた」、「分かりやすかった」、「興味深く聞いた」、「現状を理解した」、「問題意識が深まった」、「勉強になった」、「これまでの男性優位社会での女性の努力が理解できた」など、好意的感想が述べられていた。今後、このような議論を継続的に続けるとともに、その啓発、教育、広報活動を活発に進め、特に学生の参加を増やすこと、また、職場の環境整備、有給休暇、休日出勤問題など、より具体的な課題を取り上げていくよう、そして、今回のシンポジウムの開催や大学宣言を免罪符としないで男女共同参画を推進することを大学に期待するとの意見があった。さらに、「大学に残ることをあきらめようと思っていたが、それを改めようと思う。」との記述もみられた。

Q10 男女共同参画推進に関連したシンポジウムで、何かご希望の企画がありましたらお書き下さい。

今後の企画として提案いただいた内容は以下の3項目に分類できる。

1. シンポジウムのテーマ

「ジェンダー学」、「男女共同参画の世界的動向および歴史的背景」、「男女間の格差、ガラスの天井の現状」、「小中高校を含めた教育との関連」、「職場における男女の共同参画」、「法人化と男女共同参画」、「働くことと育児、社会・大学の連携」、「男性の育児参加」、「子供の側からの男女共同参画」、「意志・政策決定機関さらに政治への女性の参画」、「実例をふまえた討論」、「多様な女性研究者による研究活動以外の育児などについての講演」、「今回のシンポジウムをふまえた部局間の取り組みとその成果」、「共同参画推進のための具体策・取り組み」などが提案されている。

2. シンポジウムの形式

シンポジウムについては継続的な開催が多く希望されている。上記のテーマと関連して、シンポジウムの規模は、部局ないし少数の部局間とするもの、他大学および企業との共催とするものなどがある。基調講演者やパネリストについては、学内から、助手ないし一般職員および学生からの男性を含めての人選が提案されている。また、女性教官と学部長とのシンポジウム、反対グループとの討論、女性の多い部門と少ない部門とを混ぜた討論などの提案があった。

3. 男女共同参画に関するシステム

男女共同参画に関する具体的なシステムの実現、アドバイス窓口（男女不平等被害問題ではなく、将来計画などに対する助言等を得るため）の設置、例えば家庭と仕事の両立な

どを相談する場の要望があった。

Q11 東北大学における男女共同参画推進、または学問・教育におけるジェンダー問題についてのご意見をお聞かせ下さい。

1. 男女共同参画に関する一層の啓発と実行

「ジェンダー学を全学教育の必須科目とする」、「男性教職員にジェンダー研修をするとともに、小中高校などにおけるジェンダー教育の必要性を訴える」などの一層の啓発活動の重要性をあげるとともに、「女性の甘さも指摘できる環境も必要である」との意見もあった。また、具体策として、「女性教職員の採用に関する部局毎の目標設定と結果報告」を求める意見があった。

2. 情報の公開

東北大学の男女共同参画について、「その推進状況（男女比や教授数）を公表・公開する」、また、「不平等に関する女性教職員学生の訴えなどの内容を多くの教官に伝えるシステム」の必要性が求められた。

3. 家庭、地域・自治体との連携の必要性およびサポート体制

「男女を問わず家庭を持っても仕事をしやすい職場の雰囲気作り」、「職員・学生の出産・育児・介護休暇に際してそれをサポートする体制」、「パパクォーター制」、「保育施設の充実」等が希望された。また、大学においての身近な例として、「研究室のセミナーを夕方から夜にかけては設定しないで欲しい。子供を持つものにはつらい。」との訴えがあった。

4. その他

以上のほかに、次のような意見と要望があった。

「出産により研究を断念するということを親の側からの意見だけで論じられていますが、子供の立場から考えた意見も交えるべきだと思います。自分の子供を見ていて特に感じるのは母親の代わりは誰にもできないということです。研究を続けることも国益にかなうことですが、母親として生きることは決してマイナスではなく、長期的視野にたてば国益にかなうことだと思います。」

「過去における“女性に対する大学の開放”の東北大の歴史はすばらしい。しかし現状はよい状態にはないように思う。帝国大学での門戸解放は大学の自信と勇気の賜である。どうか今日においても“自信と勇気”は健在であることを示してほしい。」

「友人が大学院に進学しました。彼女たちが研究しやすい環境を作ってください。お願いします。」